

# 名古屋 I 遺跡

高野口町町道福島一之戸線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要

1994. 3

財団法人 和歌山県文化財センター

## 例 言

1. 本書は、和歌山県伊都郡高野口町字福島に所在する名古屋Ⅰ遺跡の埋蔵文化財発掘調査概要である。
2. 調査は、高野口町道福島一之戸線建設に伴うもので、高野口町の委託を受け、和歌山県教育委員会の指導のもとに、(財)和歌山県文化財センターが実施した。
3. 調査期間は1993年7月12日から8月6日、調査面積は約258㎡である。
4. 調査及び整理作業は、埋蔵文化財課技師黒石哲夫が担当した。
5. 調査にあたっては、高野口町教育委員会、高野口町同和室、高野口町文化財保護審議委員長上田正隆氏から御指導、御協力をいただいた。記して御礼申し上げたい。
6. 本書におけるレベル高は、東京湾標準潮位(T. P.)からの数値である。土層及び遺物の色調は、日本色研事業株式会社発行『新版標準土色帳』(1993年版)に準拠した。
7. 遺跡名の略号は14(市町村番号)・05(遺跡番号)である。(和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図による。)
8. 本書で使用した遺構の略称は、ピット-P、土坑-SK、溝-SDである。
9. 調査記録(実測図・写真)は(財)和歌山県文化財センターで保管している。出土遺物は和歌山県教育委員会で保管している。

## 目 次

I 調査の経緯	1
II 位置と環境	1
III 調査の成果	2
(1)遺構	2
(2)遺物	5
(3)まとめ	6

## 図・図版目次

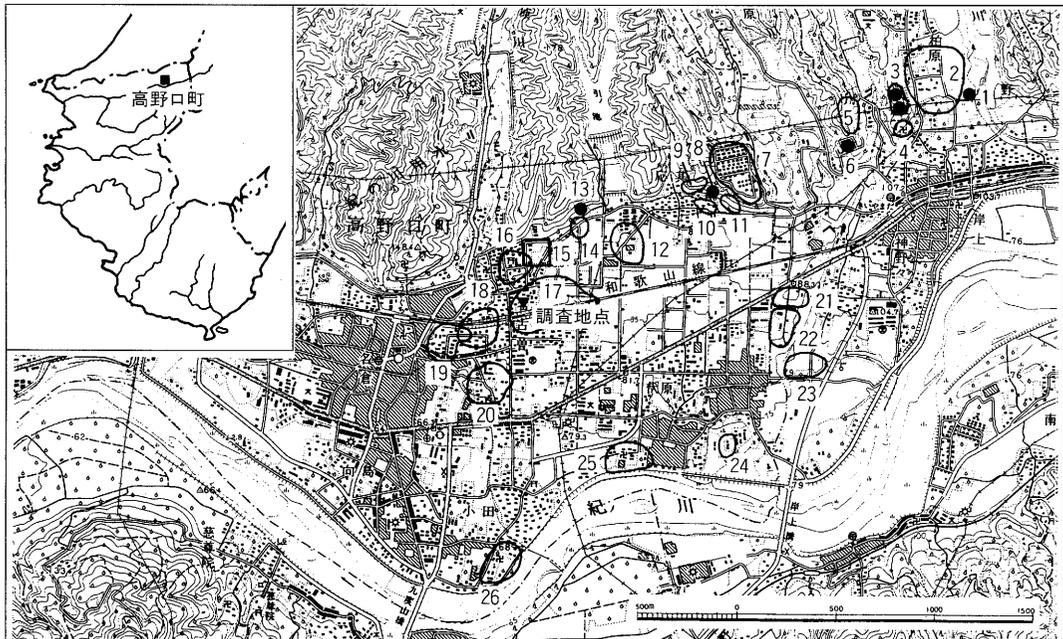
図1	調査地点位置図	図版1	上 調査区全景 下 中央部
図2	遺構平面図	図版2	上 西部・東部・土層 下 石器類
図3	遺物実測図1	図版3	包含層出土土器
図4	遺物実測図2	図版4	遺構出土土器
図5	遺物実測図3	図版5	遺構出土土器

## I 調査の経緯

高野口町は大和と紀伊を結ぶ交通の要衝地として古くから開けた土地で、町内には埋蔵文化財が多数存在している。高野口町は同町名古曾周辺で町道建設を企図したが、建設予定地に弥生土器の散布地として知られる名古曾Ⅰ遺跡が存在したため、和歌山県教育委員会に依頼し、平成4年度に試掘調査を実施した。調査の結果、予定地に遺構及び遺物が存在することが確認されたため、発掘調査が実施されることになった。高野口町は平成5年度に財団法人和歌山県文化財センターに発掘調査事業を委託し、同センターが調査を実施した。

## II 位置と環境

高野口町は和歌山県北東部の紀ノ川中流域の北岸に位置している。地形から、和泉山地の南斜面をなす北部山地、紀ノ川の氾濫源と低位の段丘をなす南部低地、その間の伊都洪積段丘の中部台地の3つに大別できる。遺跡は主に、この台地上を中心として展開している。縄文時代以前の顕著な遺跡はまだ確認されていないが、隣接する橋本市とかつらぎ町



- |          |          |           |           |           |
|----------|----------|-----------|-----------|-----------|
| 1 堂の浦古墳  | 6 神野々古墳  | 11 応其瓦窯跡  | 16 名古曾Ⅳ遺跡 | 21 神野々Ⅰ遺跡 |
| 2 柏原遺跡   | 7 平山城跡   | 12 応其Ⅰ遺跡  | 17 名古曾Ⅰ遺跡 | 22 神野々廃寺跡 |
| 3 仏性寺古墳群 | 8 応其古墳   | 13 名古曾墳墓  | 18 名古曾Ⅲ遺跡 | 23 神野々Ⅱ遺跡 |
| 4 山田瓦窯跡  | 9 応其Ⅱ遺跡  | 14 名古曾一里塚 | 19 高尾遺跡   | 24 伏原Ⅱ遺跡  |
| 5 時雨山遺跡  | 10 応其Ⅲ遺跡 | 15 名古曾廃寺跡 | 20 名古曾Ⅱ遺跡 | 25 伏原Ⅰ遺跡  |
|          |          |           |           | 26 小田遺跡   |

図1 調査地点位置図

では後期や晩期の遺構が発見されている。弥生時代の遺跡としては名古屋Ⅰ遺跡の他に名古屋Ⅱ遺跡、名古屋Ⅲ遺跡などがあり、中期の方形周溝墓とみられる遺構が確認されている。古墳は円墳で横穴式石室をもつ応其古墳が一例知られている。白鳳時代の寺院には名古屋廃寺があり、発掘調査で東に塔を西に金堂を配した法起寺式の伽藍配置で、瓦積基段であることが確認されている。伊都郡内には名古屋廃寺の他に橋本市に古佐田廃寺、神野々廃寺、かつらぎ町に佐野廃寺がある。いずれの寺院からも大和の川原寺や本薬師寺系統の軒瓦が出土しており、中央官寺とのつながりが窺える。名古屋廃寺の東北約200mの山腹からは、奈良時代の石櫃に納められた三彩の蔵骨壺が出土している。中部台地上の応其地区には古代の条理地割が現代の水田畦畔に旧状をとどめており、その北側の山裾には平安・鎌倉時代の応其瓦窯が存在する。中世の城館跡としては高尾遺跡や平山城跡などが存在する。

### III 調査の成果

#### (1) 遺 構

調査地点は標高約90.2mの水田である。基本的な土層の堆積は上から順に、① 水田地味土、② 水田床土、③ 10Y R6/2灰黄褐色弱砂質土、④ 2.5Y R6/2灰赤色弱砂質土、⑤ 2.5Y3/2黒褐色砂礫土である。今回検出した遺構は、ピット(略号P)41穴、土坑(S K)12基、溝(S D)1条、浅い落ち込み(S W)1基である。

ピット ピットには直径20cm前後の小型のものと、30～40cm程の中型のものがある。調査区の東端部では小型のピット群を検出した。P1～P6は1間×2間の掘立柱建物になる可能性がある。P1から弥生中期の甕が出土している。P7～P10はやや東に振って南北方向に一列に並んでおり、柵状の施設だと思われる。時期は不明である。

土坑 S K01は平面プランが隅丸矩形で、長さ2.04m、幅1.3m、深さ0.33mを測る。弥生中期の壺・甕とサヌカイト片が出土した。S K02は隅丸矩形で長さ1.66m、幅1.1m、深さ0.27mを測る。弥生中期の甕・壺・鉢・サヌカイト片が出土した。S K03は平面が楕円形状で、長軸1.24m、短軸0.95m、深さ0.24mを測る。弥生中期の土器片とサヌカイト片が出土した。S K02とS K03は土坑墓の可能性はある。S K04は全容が不明だが幅約1.0m、深さ約0.3mの土坑で、弥生中期の鉢が出土した。東側に近接する名古屋Ⅲ遺跡では同時期の方形周溝墓が確認されており、周溝の先端部であるのかもしれない。S K07は完掘できていないが、幅約1.8m、深さ約0.5mの矩形の土坑だと思われる。弥生中期の壺と削器が出土している。

溝 S D01は幅0.35m、深さ0.2mを測る断面U字状の溝である。弥生土器の破片が少量出土した。

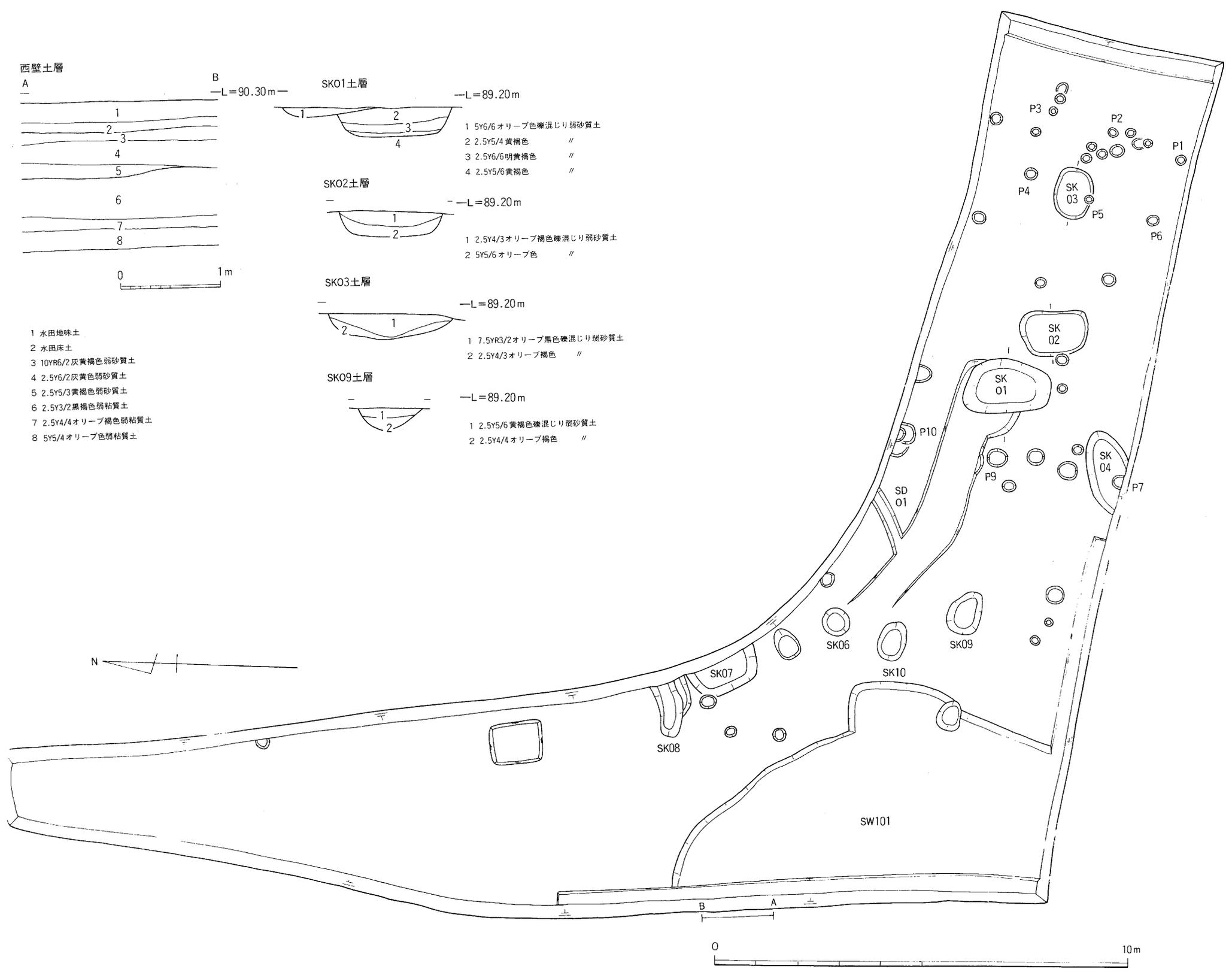


図2 遺構平面図

落ち込み SW01は調査区南西部で検出した不整形な浅い落ち込みである。底面は平坦で南西に向かって緩やかに傾斜している。弥生中期の土器と石鏃、削器が出土した。

## (2)遺物

遺物の大部分は弥生中期の土器である。古代の土師器と近世の陶器も少量出土した。石器は石鏃2点、削器3点、石槍1点が出土した。弥生土器には河内や大和からの搬入品が多くみられる。石器は二上山周辺で産出するサヌカイトと呼ばれている石材だと思われ、石屑や剝片が多数出土していることから、原石を運んで来て当地で加工していたものと推定される。

### 包含層の遺物（1～26）

1～3は奈良時代の土師器である。1は皿で口縁端部を内側に折り曲げて肥厚させ、内面には放射状のミガキがみられる。3は高坏の脚部で、12面の面取り加工が施されている。4は江戸時代の灰釉皿の底部。5～9は弥生中期の甕である。5は球形の体部にくの字状に外反する短い口縁がつき、体部外面上部には刷毛目、中下部にはミガキが施されている。6は張りの無い体部に短く外反する口縁をもち、外面には刷毛目がみられる。10は有段口縁の壺で、磨滅が著しく、調整等は不明である。11は水平口縁を有する高坏で、口縁端面の上下に細かい刻み目が施されている。内外面には密なミガキがみられる。12～15は広口壺である。12の口縁端面には簾状文が施される。16は頸部の太い広口壺で、口縁端面に沈線で格子文、頸部には直線文が施される。胎土は灰白色で金雲母片が少量含まれる。17は広口長頸壺で、頸部には断面三角形の突帯が三条貼り付けられている。18は小型の広口壺。19は蓋である。20～22は壺の底部で、22には外面底部まで密なミガキが施されている。23は段状口縁をもつ大型の鉢。外面には簾状文、内面には刷毛目がみられる。24～26は壺の腹部の破片。24は胎土が精良、赤褐色で、直線文と扇形文が組み合わせられた擬似流水文のような模様をもつ。25には直線文と波状文、26には櫛描列点文と簾状文が施されている。

### 遺構の遺物（27～51）

P1 27は口縁端部に刻み目をもつ小型の甕。頸部外面には粗いタテ刷毛、内面にはヨコ刷毛が施されている。大和南部からの搬入土器だと思われる。

SK01 28は広口長頸壺の頸部で、直線文が施されている。29～31は「く」の字状に外反する口縁の甕である。

SK02 32は口縁端部が面をなし、肩部がやや角張った器壁の薄い甕。33は紀伊型と呼ばれている甕で、胎土には多量の結晶片岩粒が含まれている。34～37は広口壺だと思われる。35には直線文と簾状文、36には直線文と波状文が施されている。38は小型の鉢。

SK04 39は有段口縁をもつ小型の鉢で、口縁端面に斜方向の刻み目がある。体部外面

には非常に細かい簾状文、内面にはミガキが施されている。40は厚手の壺の底部。

S K 0 7 41はラップ状に大きく外反する広口壺。42は直線文と波状文が施された壺の破片。明黄橙色の胎土で、結晶片岩の粒が少量含まれている。

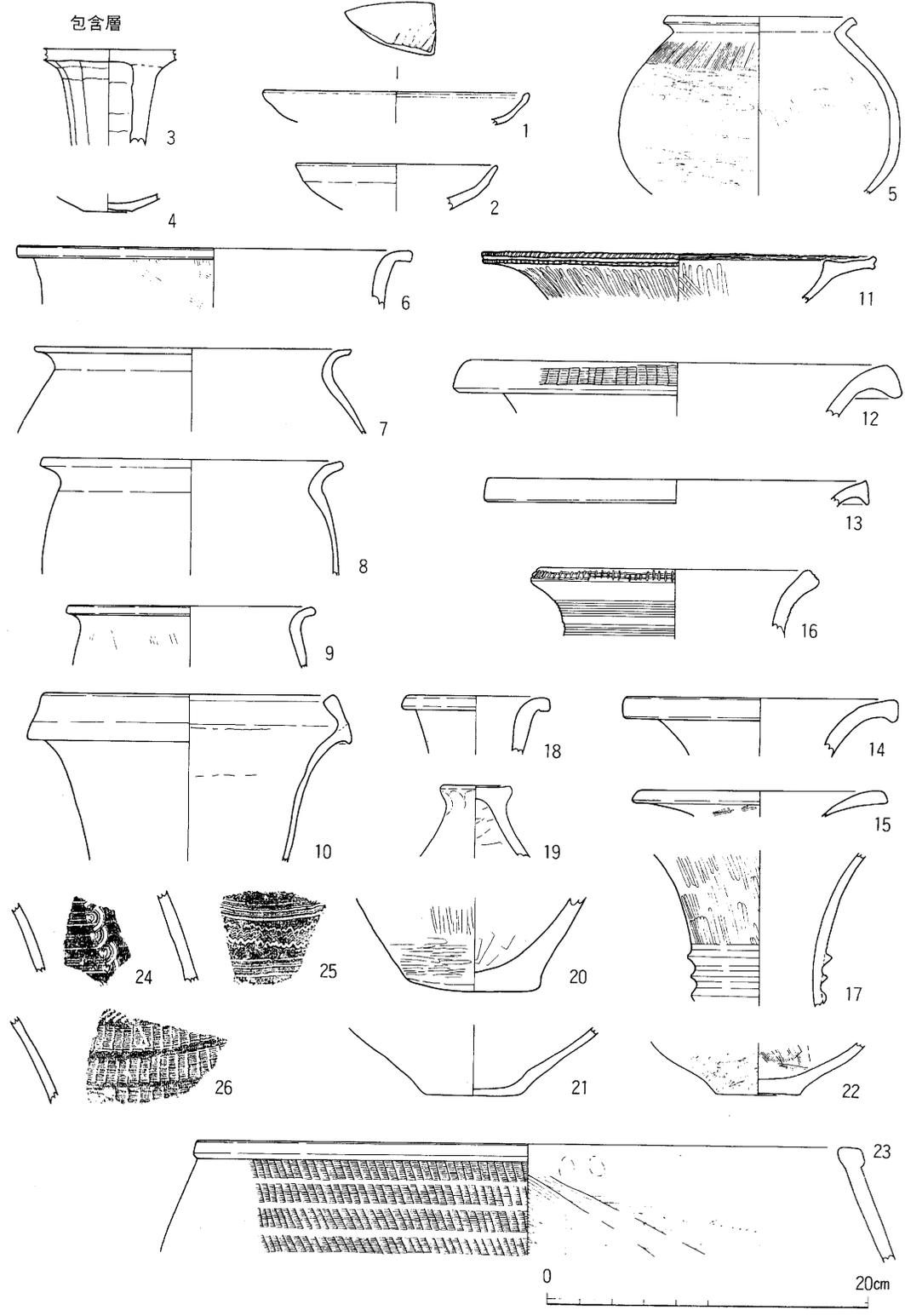
S W 0 1 43は口縁端部が面をなす器壁の厚い甕で、内外面に刷毛目がみられる。44は広口壺で、口縁端面に斜格子の刻み目が施されている。45は壺の体部で、直線文と簾状文で飾られている。46と47は直口壺の口縁部。48～50は壺の底部。なお、14・15・41は蓋の可能性はある。

石器 (51～56) 51・52・53はS W01から出土した。51は凹基無茎式の石鏃。長さ21.5cmで、基部の挟りは丸くやや浅い。52は凸基有茎式の石鏃。茎部は欠損しており、側辺には細かい鋸歯状の調整が施されている。53は削器の一種だと思われる。底部には自然面を残し、片面に集中して剝離面がみられる。54は楕円形の削器。表面の風化が他の石器より著しく、製作年代も遡りそうである。55は欠損しているが長身石槍の一部だと思われる。両端面は磨いて加工されており、再利用されていたらしい。56は剝片の刃縁部に両面から整形加工を施した削器。両端面には自然面が残る。

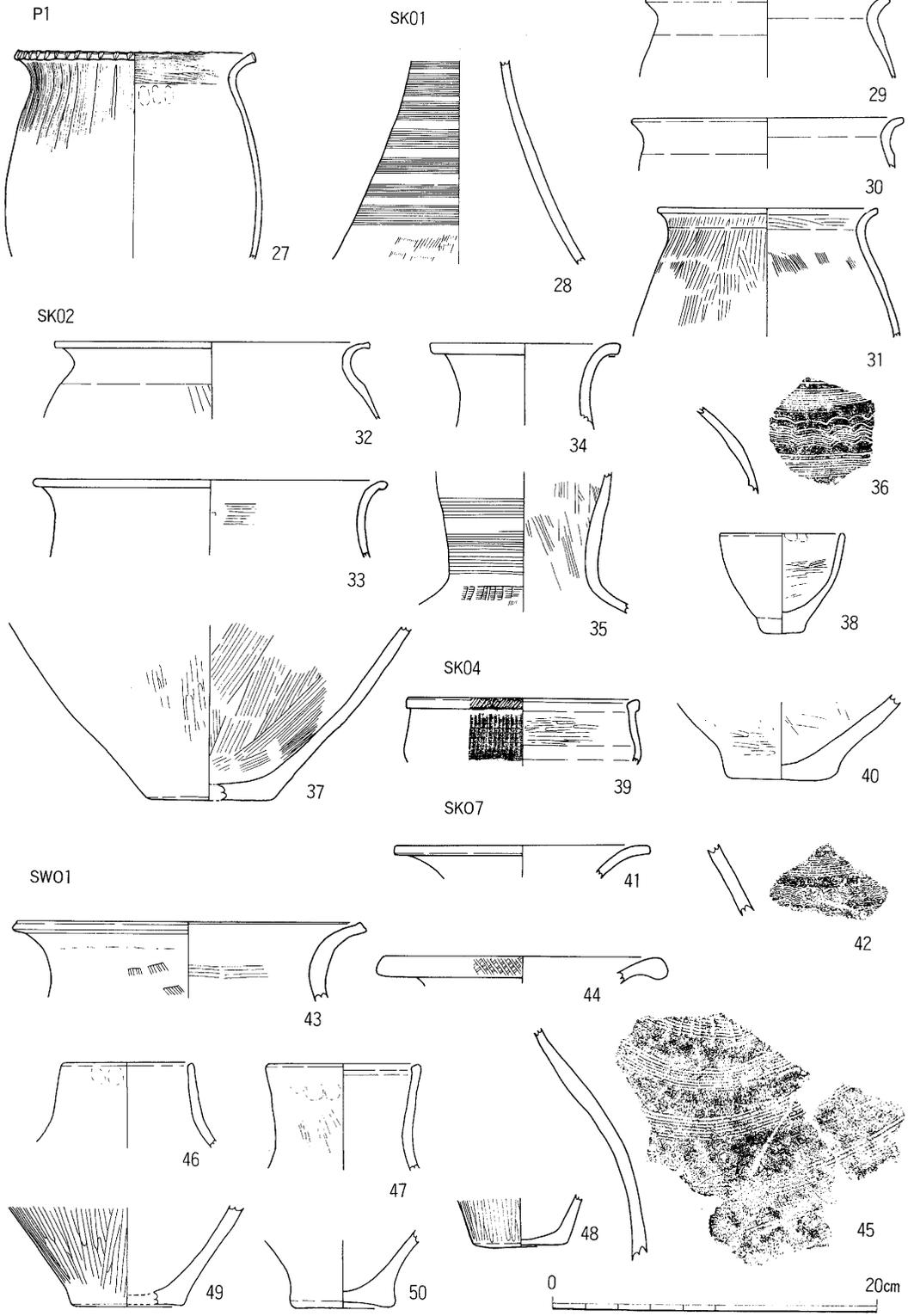
### (3)まとめ

検出した遺構の大部分は弥生時代中期に属し、P07～10は奈良時代の柵状施設の可能性がある。弥生時代の土坑の中で大型のS K01・02・03・11は成人の土坑墓で、中央部で5基並んで検出した小型の土坑S K06・07・08・09・10もそれに付随した乳幼児の土坑墓である可能性がある。また、S K05・12は周溝墓の溝の先端部かもしれない。このように、遺跡の性格としては弥生時代中期の集団墓地ではないかと推定される。出土した土器は弥生中期中葉のものが多く、大和や河内からの搬入土器もみられる。石器も同時期のものが多いが、51の石鏃と54の削器は縄文時代のものだと思われる。

遺物実測図 1

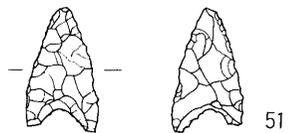


遺物実測図 2

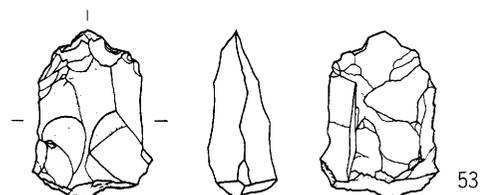


遺物実測図3

SW01



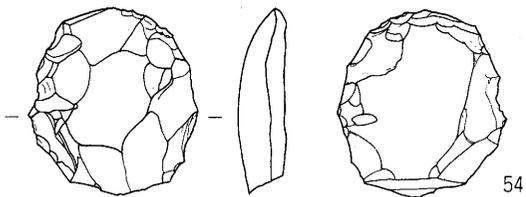
51



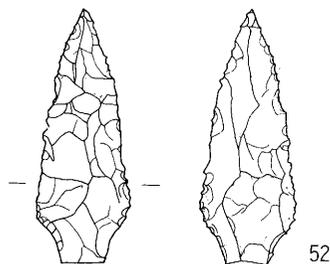
53



SK07



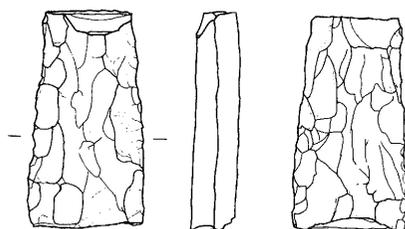
54



52



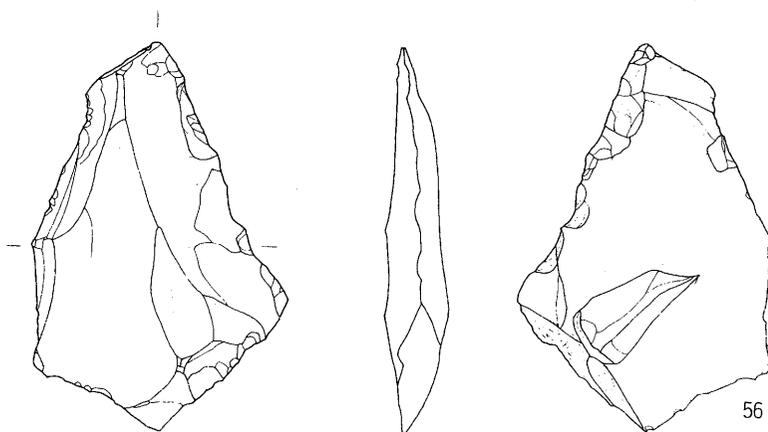
包含層



55



包含層



56

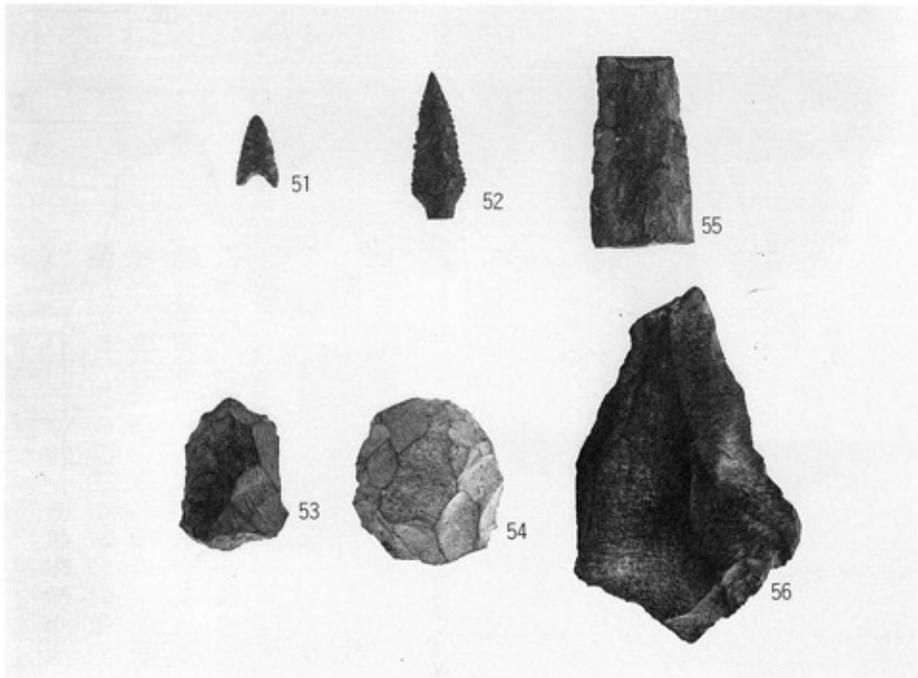
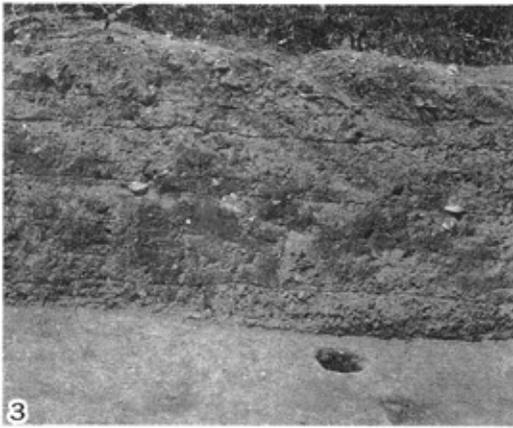




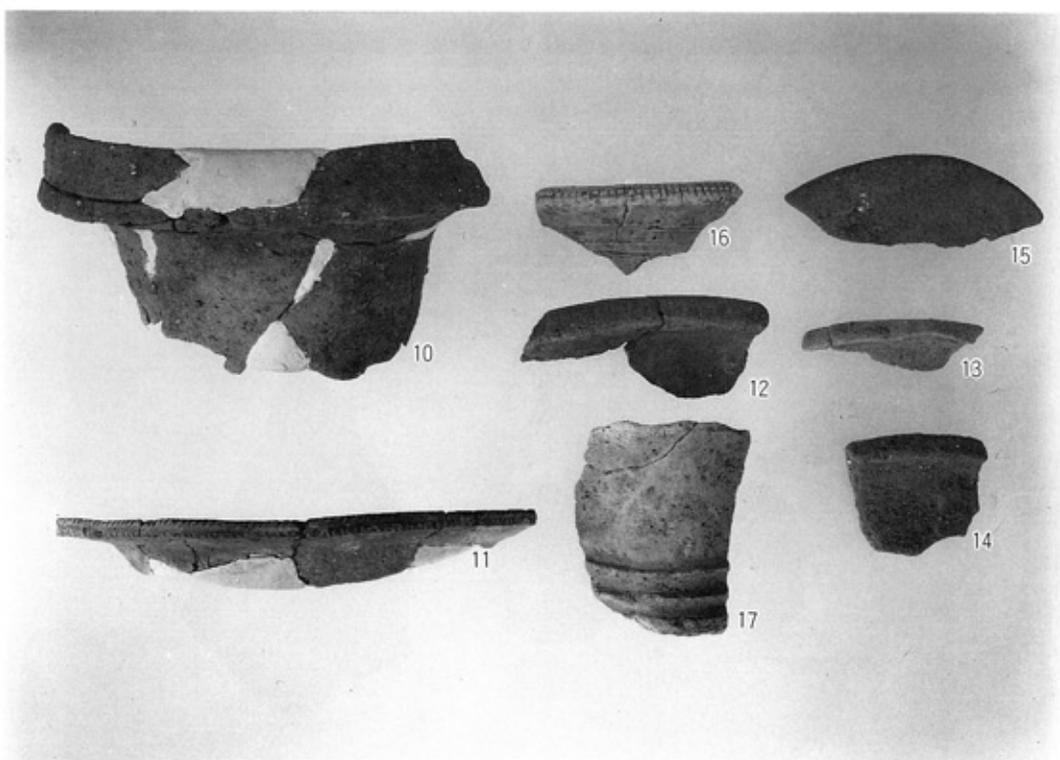
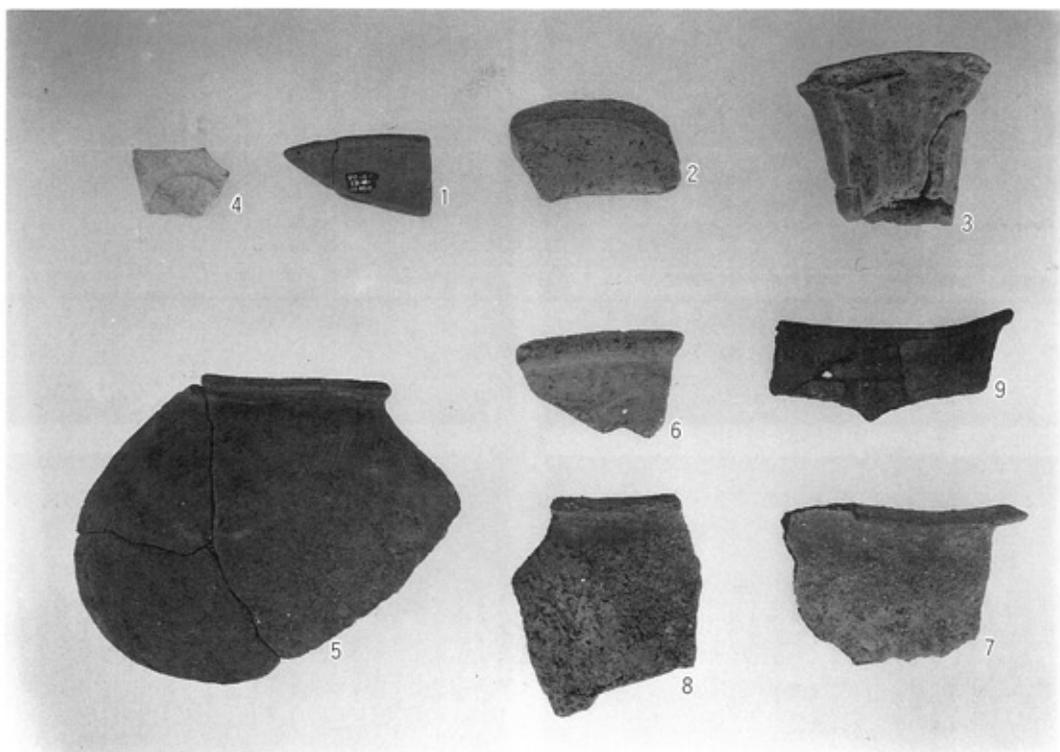
1. 調査区全景(南から)

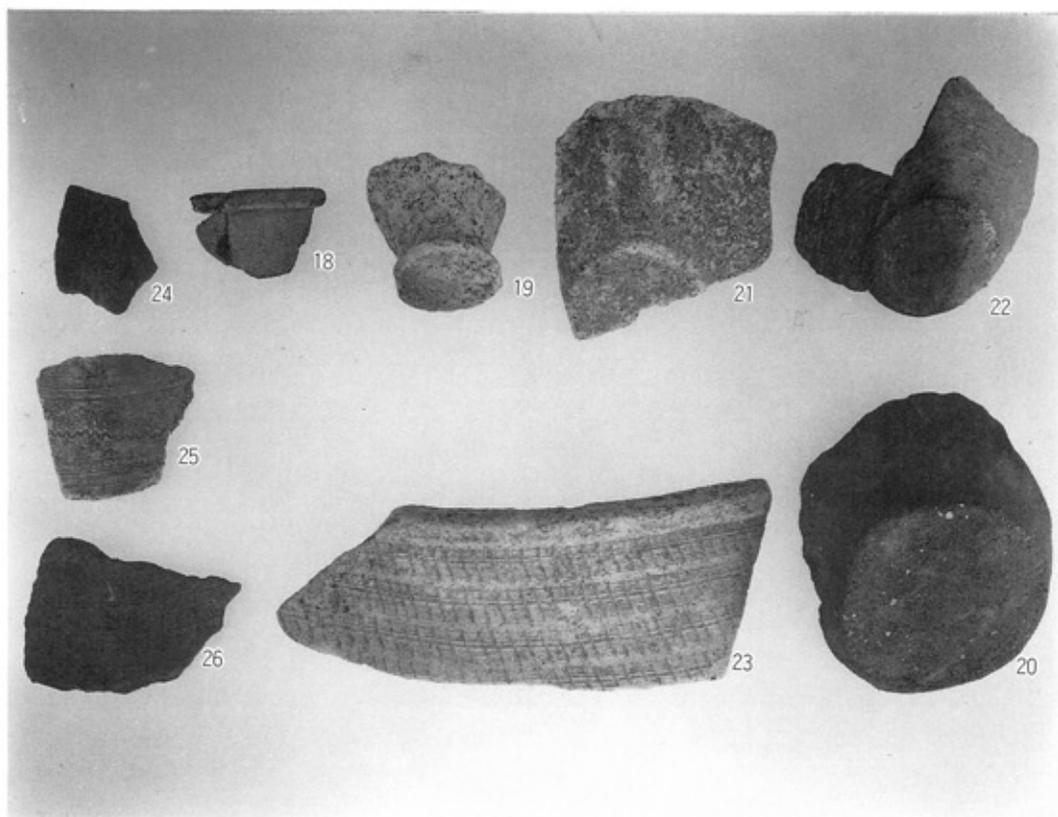


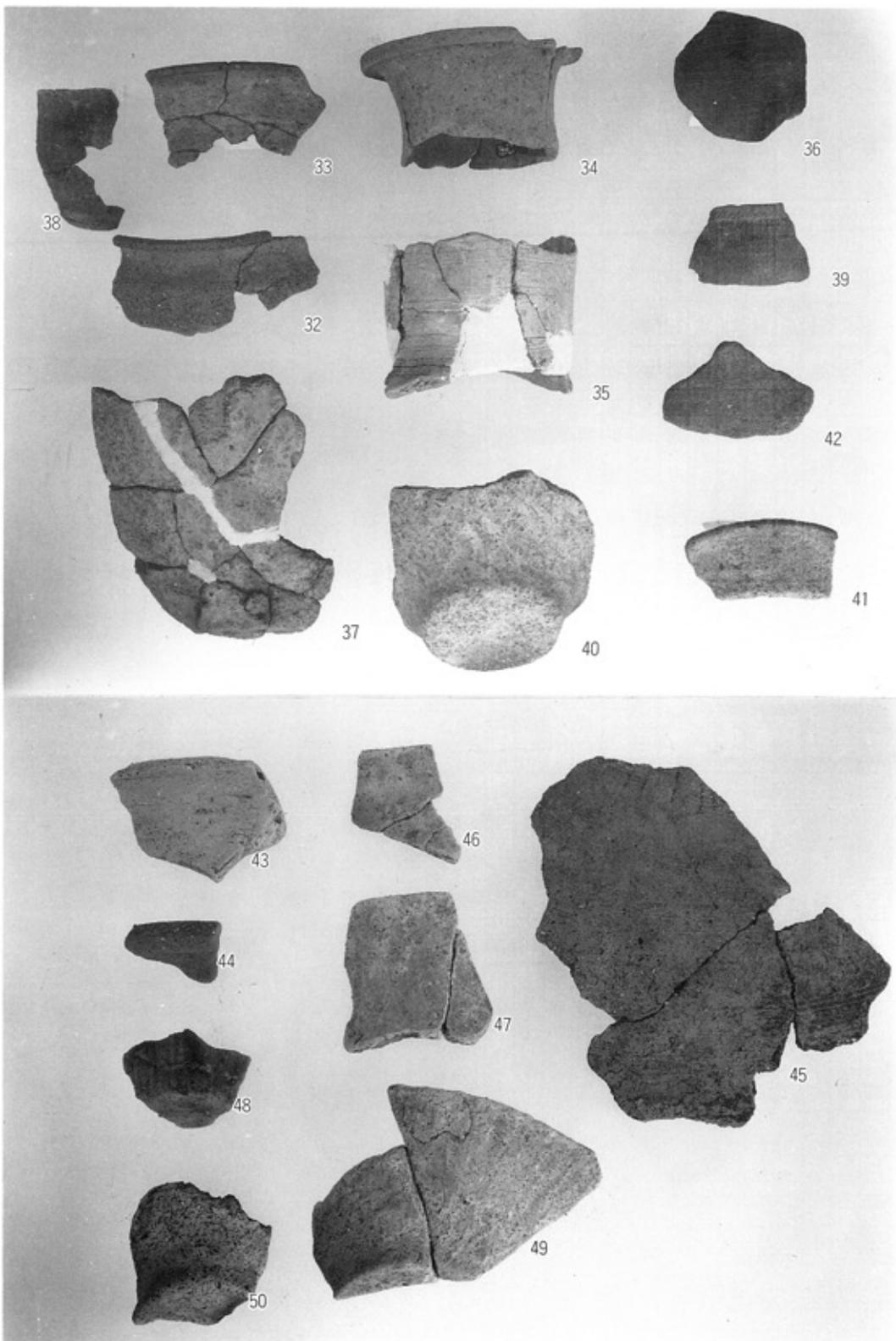
2. 調査区中央部(南から)



1. 調査区南西部 2. 調査区南東部 3. 北壁土層 4. SK02土層 51~56石器







32~38SK02 39・40SK04 41・42SK07 43~50SW01

---

**名古屋Ⅰ遺跡**

高野口町道福島一之戸線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要

1994・3

編集 財団法人 和歌山県文化財センター  
発行

印刷 中央印刷株式会社

---